

海外活動報告書

一般財団法人いのうえ生命の財団 理事長 殿

氏名	宮田 諒（日中医学生交流協会 学生責任者）
活動先国名	シンガポール、中国（広州、北京）
活動先（機関名・所属、学会名など）	NUS, 南方医科大学, 中山大学, 北京大学
活動期間（西暦）	2025年8月13日 ～ 2025年8月23日
支援金給付期間	2025年7月11日
活動テーマ	アジア諸国の医療を視察訪問

活動の実施状況及び成果

私たちは、医学部における4年間の座学を終え、日々病院実習を行いながら医師としての道を歩んでいます。新しい環境に適応することに必死で、未来の自分の姿を描く余裕を持つことが難しい現状を感じ、医学部5年生の夏休みを活用して同期10人の力を合わせ、今まさに自分たちが行っていることが、どのように病院の外の社会、そして日本、アジア、ひいては世界と繋がっているのかを実感し、視野を広げることを決意しました。

今回の渡航を通じて、中医学と、中国・シンガポール両国における最先端の医療技術・教育現場を視察させて頂きました。

まず、中医学に関してですが、4000年の歴史を誇り西洋医学とは異なるアプローチで健康を捉える学問であると現地医師の方から教わりました。医学部での厳しい学びに没頭する中で、つい自分が学んだ医学だけが唯一正しいものと考えてしまう危険性を感じました。今回の見学で、異なる視点を学べたことはそうした偏りをなくし、より柔軟で包括的な医師を目指すための第一歩になったと確信しております。

また、日本は世界一の長寿国として栄えている一方で、超高齢化社会に突入し、社会保障費が増大するという大きな課題を抱えています。こうした中で、予防医学の重要性がますます高まり、漢方薬をはじめとする東洋医学の役割が今後さらに重要になると実感しました。中国においては、漢方が普及しておりました。現地の人々は、「この安価で効果的な薬」があるから中国は長寿国であるし、医療機関への負担も軽減出来ているのだと主張していました。多様かつ多数の患者を抱える現代において、漢方による予防医療という選択肢とその実績を目で見る事が出来、貴重な機会であったと感じます。

次に、中国の西洋医学・最先端の医療はどうかを視察した所、その症例件数の多さ・病院の規模感、医療とデジタル化・商業化を積極的に結び付けようとする姿勢が伺えました。数の力が持つ勢いを見て、少子化の進むこの国の現状を変えて行く必要性を感じました。また、AIと共存して医療を請け負う時代、医療ベンチャーという分野の発展はもう既に起きている変革なのだ実感し、今の日本の医療制度や価値観についても、こうした波の影響を否応なしに受けていくだろうという予感が生まれました。中国の最先端を見ることで、日本に還元できるものが無いかを思索し、危機感を持って帰国できたことは何物にも変え難い経験であったと思います。

そして、シンガポールでは、現地のレベルの高さを伺えました。シンガポールは多民族国家であり、異なる文化的背景を持つ患者が生活しております。例えば、食習慣や伝統的な医療法が異なっており、患者の価値観に基づいた医療が求められていました。シンガポールの医療現場では、こうした文化的背景を理解し、適切に対応することが重視されており、疫学、公衆衛生への深い理解と教育が実施されておりました。また、経済成長も著しく、医療機関に対する政府からの支援も潤沢にある状況でした。経済と医療の関係性についても知ることが出来たのです。このような、シンガポールでの医療現場見学を通じて、文化的な多様性に配慮した医療の提供についてと、シンガポールがアジアでトップ水準の医療レベルを達成した所以を伺えたと感じております。

今後の活動予定

今後は、自分たちの渡航で得た知見・所感を言語化し、お世話になった先生方・慶應義塾大学の生徒へ向けて報告会を開催致します。渡航をした10人だけがこの経験を持っていても仕方なく、この国をより良い方向へ変えていくために・日本の医療の発展のためには、自分たちの経験したことをより広く・多くの人たちへ伝えていくことが必要と考えているからです。また何よりも、報告会という形で経験したことを落とし込む作業は、自分自身にとっても知識の整理となり、自分自身の今後の方向性・将来像もより明確に固まる最適解と考えます。

最後に、このような活動が来年度も引き継がれていくように、お世話になった方々への感謝を示し、来年度の派遣団の募集と次年度派遣団決定後の彼らへのサポートも徹底して行っていくことを予定しております。

海外で活動した感想（現地生活で感じたことや海外留学のメリット等）

医療という側面から、シンガポール・中国への渡航を通じて感じたことは、「医」の本質はどの国でも変わらないという所感でした。イデオロギーや宗教、医療体制の差異はありましたが、医療本来の目的は変わらず、訪れたどの土地の医療関係の方々も、非常に勤勉な方々でした。激務に追われつつも、今自国の医療が抱える問題を解決するためにどうすれば良いのか考え、自分自身の研鑽、そして次世代の教育に身を尽くしている印象を受けました。勿論、日本の医療技術・公衆衛生のレベルの高さを感じたり、日本と異なり他国で進んでいる研究分野、施設の規模の大きさ、数が多いことの偉大さに圧倒されたりした事も記憶に残っております。

また、「医」の本質は変わらないものの、国ごとにおける価値観の差から来る医療体制には違いがあるという事も感じました。例えば、中国では医療技術を積極的にAIや最先端の技術と結び付けようとする試みや、医療メーカーとの連携を強化して市場としての医療を拡大していこうとする姿勢を感じました。今の国民皆保険制度、診療報酬制度の下に平等で安価な医療を提供している日本とは確かな差があることを学び、自国の制度と異国の制度のメリットとデメリットについて考えを巡らせられました。帰国後にもこれについて頭を捻らせては見たものの、結論は出ませんでした。しかしながら、こうした海外での活動を通じて、実際に差異を目の当たりにしたことで、気付かないうちに狭くなっていた自分の視野・考え方を広げられる機会になったと痛感しております。改めて、このような貴重な機会に恵まれたこと、そして、こうした活動に対し温かいご支援ご声援を頂けたことに心から感謝しております。

指導教授（所属長）署名

署名欄 宮田 諒

日付 2025年8月31日

※活動中の写真を2枚添付してください。いただいた報告書を後日冊子にいたします。

